

# はじめに —研究の背景・経緯・概観—

## 1. 研究の背景及び目的

本研究は前研究課題「コミュニケーション障害における教育的援助に関する研究—障害状況における関わり手の役割と言語指導—（平成6年度～9年度一般研究）」を引き継ぐ形で計画されたものである。したがって、ここでは前研究課題から本研究課題にわたる研究の背景及び目的について述べる。

前研究及び本研究においては、ことばに障害のある子どもの問題状況をことばが通じない、通じにくいというコミュニケーションの障害という側面から捉え、その障害の状況にある子どもへの教育的援助に関わる新たな知見を見出すことを目的としている。

従来、通じない、通じにくいという子どものコミュニケーション上に生じた問題は、発音が不明瞭であるとか、ことばのリズムに乱れがあるとか、あるいは、ことばの理解や表出に関わる基礎的な力が不足している等の、子どもの側のことばの能力の不十分さの問題として捉えられてきた。したがって、その問題状況を解消するためには、子どものことばの能力の不十分さを改善したり、高めたりすることをねらいとして行われることが多かった。

しかし、コミュニケーション上に生じた問題は、元来、送り手と受け手（例えば、子どもと教師）のどちらか一方の問題として捉えるのではなく、両者の間の問題、両者の関わり合い方の問題であると捉えることができる。

コミュニケーションの成立は、送り手の言いたいことや思いを受け手の内面において理解すること、つまり、両者の内面世界の共有であるといえる。この意味では、たとえことばの能力の側面での不十分さがあっても、両者が内面を分かり合えればコミュニケーションは成立すると考えることができる。

したがって、「通じない、通じにくい」といったことは、両者の内面が相互に共有されているかどうかという両者の「関係」の在り方そのものの問題、すなわち、「関係の障害」として捉えることができる。

そこで、関係障害を改善していくこと、すなわち「通じない、通じにくい」という関係を「通じやすい関係」へと改善していくことを目的として、その方策を検討することが当面の課題となったのである。

## 2. 前研究における取り組みと成果

上述の課題への取り組みとして、まず、教師と障害のあ

る子どもとの関わりを事例として取り上げ検討した。教師が関わりにくいと感じる子どもとの関係を、教師の内面に着目し、その関係と推移を追った。具体的には、教師が毎回の指導に関わって行ってきたことをその時々感じたことを含めて記述した記録（ここでは指導日記と呼ぶ）を分析検討した。その中で、関係の障害の状況とその要因、関係の推移、関係の変わる契機等、関係障害（コミュニケーション障害）の構造と本質及びその改善に関わる次のような知見が得られた。

1) コミュニケーション障害は関わる側（教師）の内面に生じている事柄である。

関わり手（教師）が対象（子ども）及び対象と周囲環境（他者、物、事柄）との関係をどうみているかという見方の中に生じている。

2) コミュニケーション障害に関わる関わり手（教師）の対象（子ども）の見方の問題には、

- ①子どもの行動に目がいきやすく、子どもの気持ち等の内面に目が行きにくい状況
  - ②子どもと子どもを取り巻く周囲環境（他者、物、事柄）との関わりに目が行かず子どもの見方が広がらない状況
  - ③子どもについての心配な点、困った点に教師の意識が焦点化して広がらない状況
  - ④教師としての役割を意識しすぎることによって子どもの見方が広がらない状況
  - ⑤教師自身の限られた価値観が子どもの見方を狭くしている状況
  - ⑥教師自身の過去の経験が子どもの見方を固定化している状況
- 等があること。

3) 関係障害状況の改善は、関わる側の内面や両者を取り巻く環境を操作することにより可能であり、そのためには、

- ①子どもの内面を解釈し子どもの立場で周囲を捉えること
  - ②子どもの行動を様々に解釈してみる
  - ③子どもの楽しみにつき合ってみる
  - ④子どもの楽しみの中に、自分の楽しみを見つける
  - ⑤その子のその子らしさを肯定的に見ること
  - ⑥教師自身の思いを子どもに伝えること
  - ⑦教師自身の自分の内面を振り返ること
- 等が整理されてきている。

なお、これらの詳細は、松村・牧野（1997）、牧野・松村（1998）、及び国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部（1998）を参照されたい。

### 3. 本研究の目的と取り組みの概要

本研究では前研究における成果を踏まえ、関係援助の事例的検証の蓄積をはかりながら、

(1) コミュニケーション障害が生じている状況の類型化とそれに応じた援助の方策の整理を進めること

(2) 関係を援助していくことが一方で子どもの側の「能力」（言語力）にどのように結びついていくかを検討すること

等の課題を追求することを目的としている。サブテーマの「関係への援助と言語指導」のうち前半は上記(1)、後半は(2)に当たる。すなわち前研究から追求してきた、関係への援助のありようをより体系的に明らかにしていくこと、そして、関係への援助と言語力の関連を明らかにすることで、言語指導のありようを再構築すること等が、大きな目的である。

本研究への取り組みの過程で、関係障害の概念の整理や研究方法に関わる資料収集の在り方等について検討を重ね、以下のようなことが確認された。

#### 1) 関係障害の概念に関して

- ① 関係は、関わり手の内面に生じていること。
- ② 対象を意識した時に関係が生じること。
- ③ 他者をどのように理解するかということから関係が始まっていること。
- ④ 関係は、関わり手と対象との間にあること。

#### 2) 関係障害に関わる資料収集のあり方に関して

- ① 関係を観察する資料として、関わり手の内面を綴った記録が有効であること。
- ② 関わり手にとって、その時々感じられる感情は、その時の状況のみを反映するのではなく、それ以前の対象との関わりを背景にしていることから、関係の記述の様式は、それら背景をも含めて検討できる様式でなくてはならない。また、関係に関わる記述が、その時の状況から切り出されて記述されやすいものであることから、記述された事柄の背景を他の方法により補いながら検討する必要があること。

#### 3) 関係の記述（指導日記）分析に関して

指導日記等の記述をその内容から次のように整理できること。

- ① 客観的な事実の記録（月日や天候）
- ② 関わり手にとっての事実（起こった事柄）
- ③ 関わり手の解釈（解釈を含んだ記述）
- ④ その時、想起された感情の表現
- ⑤ 相手の立場に立った気持ちの表現

#### 4) 資料分析（日記分析）の考え方

本研究では、関わり手（教師）の側から見た「子どもとの関係」について、関わり手の日記記述を資料として分析した。分析の視点は、①記述の中から、関わり手の子どもに対する見方・見え方や気持ちが表現されている部分を取り出し、②そこから見える関わり手の子どもに対する見方や意識を検討し、それをもとに③関わり手から見た子どもとの関係を分析した。この流れは、関わり手の内面に映る子どもとの間に生じている心理的現実を日記記述を通して解釈し、その解釈の積み上げによって、関わり手の子ども理解、関わり手と子どもとの関係に接近しようとするものである。

### 4. 本報告書の構成

本報告書は、大部分が、実践の場で活躍されている本研究の協力者の報告から成り立っている。ことばの教室、養護学校、福祉施設、地域療育等の場でコミュニケーション障害、関係障害の問題にいかに関わり込んでいったらよいか、関わり手の内面のありようを中心に報告されている。これらの多くは、上述の指導日記等、関わり手の内省記述をもとにしたものである。

#### <文献>

- 国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部：コミュニケーション障害における子どもへの教育的援助に関する研究。一般研究報告書，1998。
- 松村勘由・牧野泰美：子どもと教師のコミュニケーション関係の変遷—指導日記の分析とその活用—。国立特殊教育総合研究所研究紀要，24，81-87，1997。
- 牧野泰美・松村勘由：子どもと教師のコミュニケーション関係の変遷（2）—関係障害の要因と援助の視点—。国立特殊教育総合研究所研究紀要，25，35-44，1998。

（松村勘由）